

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No. 1778 長期継続前兆 本日 6/12迄の観測データを再検討→近々及び6月中に発生の可能性否定

2008年07月より出現継続している長期継続前兆No1778前兆の続報。本年7月で8年間と云う観測歴上最長継続の特殊前兆(通常の地震前兆は数日~数ヶ月が多い)です。

前号までの解析からは、最も早い可能性として、本日6月12日に前兆が終息した場合は、6月14日発生の可能性があることを報告致しました。本日前兆終息が認められない場合は現在の前兆関係認識に誤りがあります。

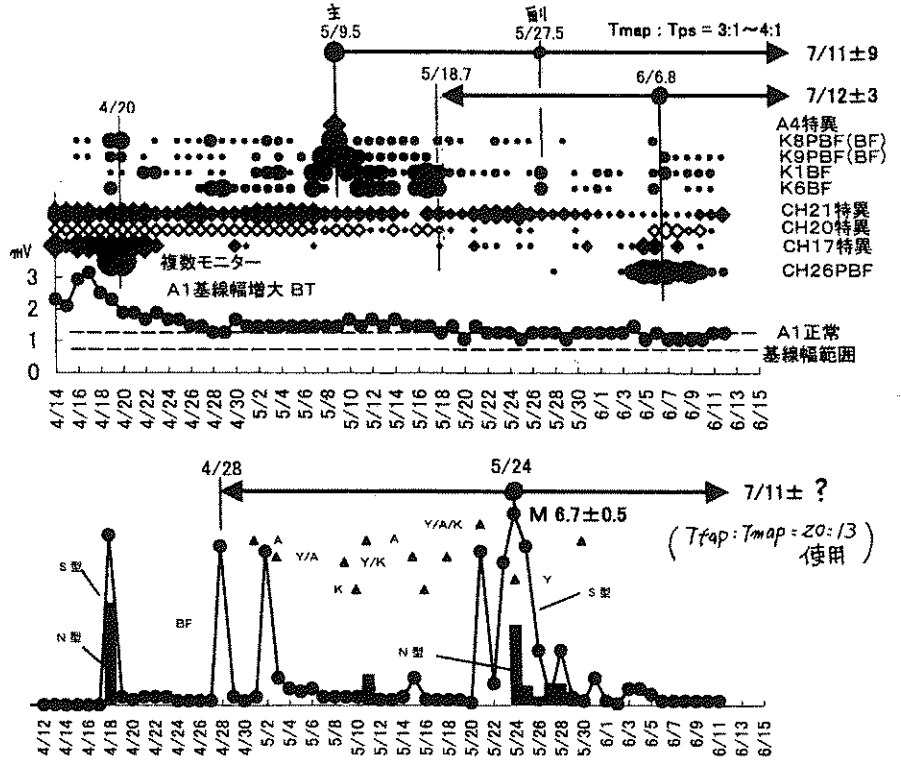
本日6/12夕刻現在、CH21特異は通常基線電圧値+5~6mV に対し、0~1mV付近で推移しており、やや強い特異状態継続出現中。(CH26-PBFは、本日スプリークが強く出現、識別困難です)

従って、近々並びに今月中に対応地震が発生する可能性は否定される見解となりました。該当地域の皆様には、ご心配をおかけ致しました。申し訳ございません。前兆を再検討致します。

5/24に極大認識される火山帯近傍地殻地震前兆も群発経験則使用での活動発生が認められないことから、No1778前兆と同一活動前兆である可能性が高いと思われます。

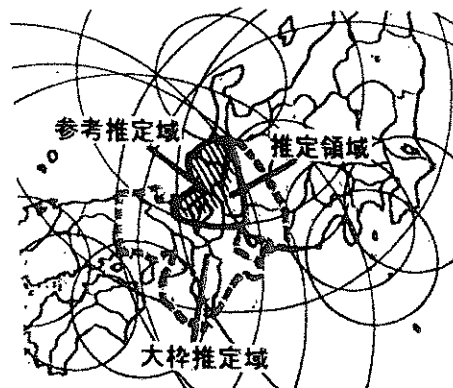
右図上はNo1778前兆第16行-。右図下は火山帯近傍地殻地震前兆の前兆出現状況図です。

まずは右図上のNo1778前兆から。5/9.5(主極大)に対して、5/27.5のK1,K6のやや顕著なBF前兆出現が副極大である可能性を考えました。主極大~発生=Tmap 主極大~副極大=Tpsとしたとき、Tmap:Tps=3:1~4:1の経験則があります。主な関係は3.7:1です。前述の関係からは、3.7:1使用で7月15日±が計算できます。主極大が緩やかな山型の場合は4:1に近く、主極大が鋭い山型の場合は、3:1に近い過去例。今回は若干主極大が緩やかに見え、4:1使用の場合は7月20日±迄考えられます。またCH17特異が5/18夕刻から出現したものを初現と考え、



6/6.8 極大に対応させますと、7月12日±3が計算できます。現状可能性が検討できるのは以上の2つの関係です。火山帯近傍地殻地震前兆の方は最初の4/18を除いてN型を含まない4/28を初現とし、5/24極大に対応させ、通常地震経験則を使用しますと7月11日±が計算できます。火山帯近傍地殻地震前兆で通常地震前兆経験則を使用したことは過去例に無し。現状、推定根拠が乏しく、正しいか否か不明ですが、可能性が考えられる関係を検討致しました。実際の前兆終息を観測し、正しく推定したいと考えます。

- ◆推定領域: 右図 ・大枠推定領域=点線領域内
・推定領域 =太線領域内
・参考推定領域=斜線領域
◆推定規模: M7.8±0.5
(火山帯近傍地殻地震前兆が同一の場合は、(火山帯近傍地殻地震前兆からはM6.7±0.5)
※群発経験則不使用の為、群発的活動の可能性無し
◆推定時期: 実際の前兆終息を観測して計算予定
参考: 7月12日±3時期の可能性も考えられる
(前兆終息後まで発生の可能性は考えられない)



※本日6/12朝7:54 茨城南部 M5.0 -40km(最大震度4) 発生。(気象庁速報) No1778以外、最近では唯一別地震前兆として5/24にK6BFが観測され、千葉~茨城M4.8±0.5 6/5±3 発生の可能性を6/3にNo2786観測情報で推定報告。時期のみ誤差大でした。※他に大型地震前兆はありません。※熊本地震前兆も4/10が最終前兆でその後は無し。